

31 我が街 船橋を歩く—船橋の魅力(2) 家康と船橋(2)— —家康が船橋を重視した背景 江戸と船橋の地形—

29期 仲田 元昭

今回より船橋の魅力シリーズとして大河ドラマ「どうする家康」にちなんで「家康と船橋」をテーマとした街歩きのご案内です。

江戸と船橋は、風水の見地からも地形が類似しており、家康公が船橋を東からの攻めの防御の拠点として戦略上重要視したともいわれています。風水による地形は、北に山(玄武・黒)を頂き、東に川(青龍・青)を控え、南に海(朱雀・朱)があり、西に道(白虎・白)の通ずる場所とされています。

「江戸」

江戸は、武蔵野台地の東の端にあり、北に本郷台地、東に隅田川、南に江戸前の内海、西に甲州道があります。

丸の内は船橋と同じ低地で中世までは日比谷入江が入り込み、湧き水も豊富で戦略上最適な地形であったようです。

家康は、これらの地形を活用し江戸城に入府後1590年より秀忠・家光三代50年を費やし全国105の大名を総動員して、内堀・外堀・36の見附(見張り番所)を持つ我が国最大規模の城郭を完成させます。

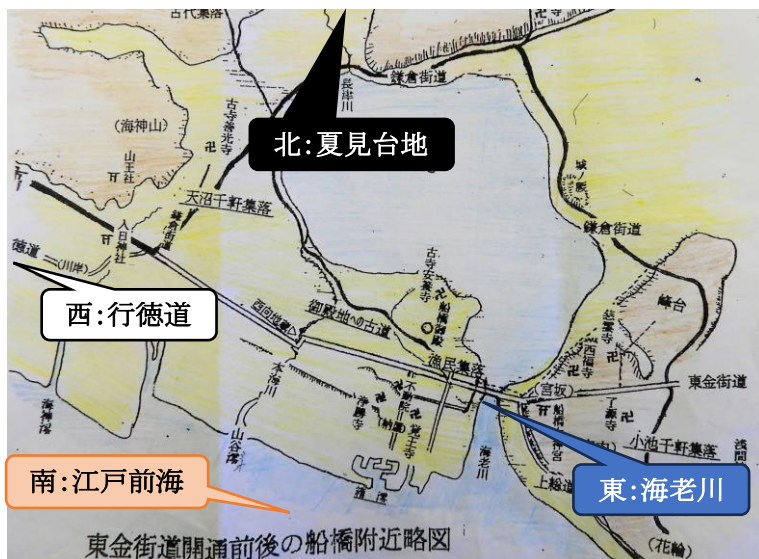


江戸 江戸城高低差マップに加筆

「船橋」

船橋は、下総台地の西の端にあり、北は高さ20m程の夏見台地、東に中世より水運に恵まれた海老川、南に漁場(御菜浦)をもつ江戸前の内海、西に江戸に通ずる行徳道、船橋市内の一部は中世入江であったといわれ湧き水(葛飾湧水群)も豊富で、江戸と地形が類似しています。

また船橋には、家康が小牧・長久手の戦いや関ヶ原の戦い等で軍功を上げた家康の側近、成瀬正成に江戸入府に際し、下総国葛飾郡栗原郷(現船橋)に知行所4千石を与えた(船橋で最初の大名)小栗原城跡と東金街道があり、東からの攻めの防御も役割であったといわれています。



船橋 1600年頃の想像図に加筆

(参考資料：千代田区日比谷図書館文化館マップ、船橋地名研究会資料他)「32 我が街 船橋を歩く 船橋の魅力(3)」に続く「2023-7-1 寄稿」